

2025 年 1 月 16 日_原子力学会標準委員会 遮蔽材料標準作業会 第 41 回会合 議事録(改 0)

1. 日時：2025 年 1 月 16 日 14 時～16 時 30 分
2. 場所：日環研サラエボ会議室＋Web TEAMS
3. 出席者：【敬称略】(ATOX)坂本、月山、河野*、(北大)中島、(日環研)大石*、(海技研)平尾*、(CTC)石川、天野、(清水建設)小迫、(原安技センター)吉田、(大成建設)谷口*、(日立 GE)竹生、(MHI)大沢、(NDC)中田* (文責)
(*：日環研会場)
4. 配布資料；
資料 0 原子力学会標準委員会放射線遮蔽分科会遮蔽材料標準第 41 回作業会議事次第(中田)
資料 1-1 標準委員会審議状況(中田)
資料 1-2_SC98-3-10-1_放射線遮蔽計算に用いる材料組成（コンクリート編）(中間報告)標準委員会説明資料
資料 2 #98 標準委員会意見募集でのコメント
資料 3 今後の専門部会、標準委員会対応計画(中田)
資料 4 2025 年春の学会(26)-(28) (奥野さん、大沢さん、中田)
資料 5 標準お化粧直しの件(中田)

5. 議事

今回は、2024 年 8 月 1 日及び 11 月 1 日開催の基盤応用・廃炉技術専門部会での中間報告、並びに 12 月 4 日開催の標準委員会での中間報告の状況を共有するとともに、今後の最終報告・発行までの計画と懸案事項を協議した。

以下に協議の結論と特記事項を示す。

(1) 標準委員会審議状況（資料 1-1、2）

中田から、専門部会、標準委員会での審議状況を説明。

- ・第 63 回専門部会（8 月 1 日開催）で本文＋附属書を説明し 30 日間の意見募集となった。また、第 64 回専門部会（11 月 1 日開催）で、本文＋附属書＋解説完本版を提出し、第 63 回でのコメント反映修正内容と解説の概要を説明し、標準委員会に中間報告することを決議いただいた。
- ・第 98 回標準委員会（12 月 4 日開催）で中間報告を行い、30 日間の意見募集の決議をいただいた。

(2)第 98 回標準委員会意見募集結果（1 月 15 日締め切り）の紹介と対応作業分

担（資料 2）

1 月 15 日夜に原子力学会事務局からコメント到来、技術的な大きなコメントは無し。中田からコメントと対応分担を記した表を 1 月 16 日に作業会委員に配布。2 月 5 日開催の専門部会への対応方針と標準改定版の説明必要のため、コメント対応表への方針記入と標準修正を、標準修正手順と共に依頼（1 月 21 日の正午まで）。

(3) 今後の専門部会及び標準委員会への対応計画（資料 3）

2 月 5 日開催の専門部会対応は、コメント反映の期間が短いため、事務局指定の 1 月 22 日資料提出を目標とするが、来週一杯（1 月 24 日まで）の猶予を事務局に御願いをすることを念頭に置く。

3 月 5 日開催の標準委員会は、決議投票されると公衆審査となる。ここで、現状附属書の図表は実数表示（ $10^{○○}$ ）となっているがカラー印刷の物があり、解説は指数表示でカラーのため、実数・白黒にすることが必要ならば、3 月 5 日委員会への提出は諦めて 6 月の委員会に順延する必要があるかも知れない。

本件の対応を、5 項に示す。

(4) 2025 年春の学会発表（資料 4）

標準委員会で中間報告を審議いただき、技術的コメントが特に無かったので、本標準の記載概要と使い方を主題に、「概要」、「標準組成」及び「組成変動による線量率影響評価」の 3 部作で報告し、10 年間の学会活動での進捗報告を終了する。これで、合計 28 作＋企画セッションでの報告となる。今後、標準が公衆審査を終了し、標準発行となる段階で企画セッションを行い、使用方法と使用例に焦点を置いた「取扱説明」と、次の遮蔽材料標準（又は技術レポート）の検討紹介の発表で、コンクリート編は 10 数年の活動を終了する。

(5) 標準お化粧直し（資料 5）

上述 3 項で示したお化粧直しは、下記の手順で進める。

- ① カラー／白黒は印刷代の観点なので、天野幹事にて、カラーでなければならぬページ数を確認のうえ、原子力学会事務局にカラーの可否と解説掲載の図表での指数表示の可否を確認する。
- ② カラーと解説の指数表示が OK ならば第 99 回の標準委員会（3 月 5 日開催）を目指して、対応を進める。
- ③ 特に解説での指数表示が不可の場合、標準委員会への最終報告は 6 月提出も考慮する。
- ④ ここで、図表お化粧直しは、近年の計算による図表は担当者が明確でデータ

も確保できるので、各担当者にて対応頂く。

- ⑤ 2016 年及び 2017 年ころのスペクトル、線源別のケーススタディと、Fe 成分のケーススタディは、東芝、日立、ATOX、MHI で実施しているが、ATOX 以外は担当者が変わっているので、各社でデータの再現性を確認する。

東芝：松山さん／吉岡さん

日立：竹生さん／現 ATOX 月山さん

MHI：大沢さん／尾方さん

平行して、中田にてデータは保存している古いデータ掘り出しを行う。

(6) 建築学会対応

建築学会活動の論文引用については、東京大学の丸山先生に 1 月中の面会申し入れを行い、本標準の進捗を説明し、論文が近々発行されるなら引用を、まだ先ならば題名だけでも教え頂き「to be published」で掲載させて頂くことをお願いする。原子力学会の本標準は、丸山先生の御意向に関わらず発行手続きは進める。

丸山先生との面会は、中田、分科会主査の坂本さん、作業会副主査の平尾さん、建築学会の前中さんで考慮する。

以上